看護学生の社会人基礎力の自己評価の比較

―新型コロナウイルス感染症流行における影響―

佐々木　真湖　切明　美保子　古舘　美喜子　田中　克枝

要旨

本研究は、看護学生の社会人基礎力の自己評価におけるＡ大学看護学科の 2022 年度４年生の１年次と４年次の経年的変化、新型コロナウイルス感染症流行前（2019 年度４年生 56 名）とコロナ禍（2022 年度 55 名の４年生）の比較から、新型コロナウイルス感染症流行による日常生活の制限や臨地実習の減少が看護学生の社会人基礎力にどのような影響があったかを明らかにした。経年的変化では、前に踏み出す力（アクション）のみ４年次が有意に高く、能力要素の「傾聴力」が４年次に有意に低かった。新型コロナウイルス感染症流行前とコロナ禍の比較では、考え抜く力（シンキング）、チームで働く力（チームワーク）の２つの能力、「実行力」「課題発見力」「創造力」「発信力」「傾聴力」「柔軟性」「規律性」の７つの能力要素はコロナ禍（2022 年度）が有意に低かった。新型コロナウイルス感染症流行に伴い、臨地実習の減少や背景や環境が異なる人々との交流の機会の減少が要因として挙げられた。また、学内実習が多くなり、患者・指導者との関わりの減少や患者のイメージがわかない、態度面の指導を受ける機会が少ないなども要因として考えられた。今後、学内実習に切り替わった場合は教育方法のより一層の工夫やコミュニケーション能力向上の取り組み、学習姿勢や態度に対する指導の工夫が必要である。

キーワード：社会人基礎力　看護学生　新型コロナウイルス感染症

Ⅰ．はじめに

経済産業省[1]が 2006 年に提唱した「社会人基礎力」とは、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」とされている。「前に踏み出す力（アクション）」、「考え抜く力（シンキング）」、「チームで働く力（チームワーク）」の３つの能力、12 の能力要素から構成されており、「前に踏み出す力」の能力要素には、「主体性」「働きかけ力」「実行力」、「考え抜く力」には「課題発見力」「計画力」「想像力」、「チームで働く力」には「発信力」「傾聴力」「柔軟性」「情況把握力」「規律性」「ストレスコントロール力」の要素が含まれる。

看護職において社会人基礎力は、「医療機関をはじめ、広く地域社会で、幅広い年代にわたる多様な価値観をもつ人々、同じ看護職や多職種の人などと交わり、適切なコニュニケーションをとりながら看護実践をしていくための基礎的な力」[2]と考えることができる。看護職を目指す看護学生にとっても、社会人基礎力は必要な力であると言える。社会人基礎力と看護実践力は相互作用的に伸長するもの[3]とし、実習は社会人基礎力を向上させることにつながる[4]と報告されている。社会人基礎力は、学年が進むにつれて人とのかかわりや経験が増えることから身についていく。

ここ数年、新型コロナウイルス感染症の流行により、臨地実習の機会が減少した看護学生が存在する。臨地実習は、学習してきた知識・技術をもとに、看護実践力を身につける場であり、ま

た看護を学ぶ学生としての学習姿勢や態度を学ぶ場でもある。新型コロナウイルス感染症流行に伴い、令和 2 年 2 月・6 月に出された文部科学省と厚生労働省による「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療機関関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について」[5)6)] では、「実習施設の確保が困難である場合には、年度をまたいで実習を行って差し支えないこと。なお、これらの方法によってもなお実習施設等の代替が困難である場合、実状を踏まえ実習に代えて演習又は学内実習等を実施することにより、必要な知識及び技能を修得することとして差し支えないこと」が示された。2020 年度看護系大学 4 年生の臨地実習科目（必修）の実施状況調査結果報告書 [7)] によると、計画された実習の実施状況は、「すべて学内に変更」が 74.1%を占め、「計画通りに実施」は 1.9%であった。また、感染症の流行は、日常生活での制限もあり、人との関わりも希薄になる。さらに、臨地での実習が減少したことにより、社会人基礎力の低下が懸念される。高橋 [8)] は、新型コロナウイルス感染症流行下に看護基礎教育を受けた新人看護職員は、これまで以上に、看護基礎教育修了時点の自身の能力と臨床現場で求められる能力とのギャップや職場内での人間関係構築の困難さなどによる現場でのリアリティショックを受けることが予想されるとし、それを乗り越えるためには社会人基礎力の発揮の必要性を強調している。

そこで、本研究の目的は、2022 年度 4 年生の 1 年次と 4 年次の経年的変化、2019 年度（新型コロナウイルス感染症流行前）と 2022 年度の 4 年生の社会人基礎力の比較から、新型コロナウイルス感染症流行による日常生活の制限や臨地実習の機会の減少が看護学生の社会人基礎力にどのような影響があったのかを明らかにすることである。今回得られる結果は、コロナ禍を過ごしている看護学生への社会人基礎力向上に向けた指導、コロナ禍を看護学生として過ごした新人看護職員への研修内容を考える上での貴重な資料となり得る。

Ⅱ．研究方法

１．研究デザイン

2022 年度の学生の 1 年次と 4 年次の経年的変化は縦断研究、新型コロナウイルス感染症流行前（2019 年度 4 年生）とコロナ禍（2022 年度 4 年生の 4 年次）の比較については、横断研究である。

２．研究対象者

2022 年度の全実習の単位を修得した A 大学看護学科 4 年生 55 名、2019 年度 4 年生 56 名を対象とした。

３．調査期間：2019 年 12 月～2020 年 1 月、2022 年 11 月～12 月

４．調査方法

経済産業省の社会人基礎力育成の手引きの「社会人基礎力レベル評価基準」と一般社団法人留学生支援ネットワークの社会人基礎力チェックリストを参考に、社会人基礎力自己評価表を作成した。2022 年度 4 年生の社会人基礎力の評価は 5 件法とし、5：期待される能力・行動の発揮度が抜群であり、模範となる（発揮度 100%）、4：期待される能力・行動がほとんど申し分なく発揮されていた（発揮度 90%程度）、3：期待される能力・行動がおおむね発揮されていて問題がなかった（発揮度 60～70%程度）、2：期待される能力・行動が部分的にしか発揮されず、やや問題があった（発揮度 40%程度）、1：期待される能力・行動が全く発揮されず大いに問題があった（発揮度 0%）である。調査方法は集合調査法とした。なお、2022 年度 4 年生の 1 年次と 2019 年度 4 年生は 3 件法で実施されており、3：通常の状況で効果的に発揮できた（見事にできた）、困難

な状況でも発揮できた（とても難しかったが、なんとかできた）、2：通常の状況では発揮できた（なんとかできた）、1：発揮できなかった（どうしてもできなかった）としている。

５．分析方法

2022 年度 4 年生の 1 年次のデータと 2019 年度 4 年生のデータは 3 件法で実施されていたため、分析、検討するにあたり、2022 年度 4 年次のデータの再割り当てを行った（割り当て方法は表 1 参照）。

2022 年度 4 年生の 1 年次と 4 年次の平均値の経年的変化の検討において、3 つの能力の比較では対応のある t 検定、12 の能力要素の比較では分散分析を行った。2019 年度（新型コロナウイルス感染症流行前）と 2022 年度の 4 年生のデータの比較検討においては、3 つの能力の比較では正規分布していたため t 検定、12 の能力要素の比較では χ^2 検定を行った、統計解析ソフトは SPSS　Ver.25 を用いた。いずれも、有意水準は 5%以下とした。

表1　データの再割り当て

2022年度の尺度		2019年度の尺度
5：期待される能力・行動の発揮度が抜群であり、模範となる 4：期待される能力・行動がほとんど申し分なく発揮されていた	→	3：通常の状況で効果的に発揮できた（見事にできた）
3：期待される能力・行動がおおむね発揮されていて問題がなかった	→	2：通常の状況では発揮できた（なんとかできた）
2：期待される能力・行動が部分的にしか発揮されず、やや問題があった 1：期待される能力・行動が全く発揮されず大いに問題があった	→	1：発揮できなかった（どうしてもできなかった）

６．倫理的配慮

調査協力は研究趣旨や方法、匿名性の保持、自由意思の尊重、協力が得られない場合でも何ら不利益を被ることがないこと、データの管理についてを口頭と紙面で説明した。結果の公表に際しての匿名性、データは統計学的に処理を行い、個別の回答内容を公表しないことを保証した。研究への参加は社会人基礎力自己評価表の提出を持って、同意を得たものとした。2019 年度のデータについては、他の研究への使用も同意している。

なお、本研究は、八戸学院大学倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号 22－09）。

Ⅲ．結果

2022 年度の対象者 55 名に配布し、55 名の回答（有効回収率 100%）、2019 年度は 59 名の内 56 名の回答（有効回収率 94.9%）であった。

１．対象者の概要

対象者の性別は、2019 年度女性 52 名、男性 4 名、2022 年度女性 48 名、男性 7 名である。対象者の臨地実習状況を表 2 に示す。

表2　2022年度の臨地実習状況

実習名	対象年次	2019年度	2022年度	
基礎看護学実習Ⅰ	1年次春学期		全て臨地実習	
基礎看護学実習Ⅱ	2年次秋学期		全て学内実習	
成人看護学実習Ⅰ	3年次秋学期～4年次春学期	全て臨地実習	約6割が臨地実習	
成人看護学実習Ⅱ			約6割が臨地実習	
高齢者看護学実習Ⅰ			約4割が臨地実習	
高齢者看護学実習Ⅱ			約7割が臨地実習	
精神看護学実習			約7割が臨地実習	
小児看護学実習Ⅰ			約8割が臨地実習	
小児看護学実習Ⅱ			約3割が臨地実習	
母性看護学実習			約8割が臨地実習	
在宅看護学実習	4年次春学期		約9割が臨地実習	
統合看護実習			約3割が臨地実習	
公衆衛生看護学実習Ⅰ	4年次秋学期		全て学内実習	※選択制10名
公衆衛生看護学実習Ⅱ			約7割が臨地実習	

２．2022 年度４年生の１年次と４年次の経年的変化

１）３つの能力の比較（表 3）

対象者の１年次のデータと対応のある 47 名を対象とした。１年次と４年次の３つの能力について、対応のある t 検定を行った結果、「前に踏み出す力（アクション）」のみ、１年次より４年次が有意に高かった（t（46）＝0.115，p＜.05）。「前に踏み出す力（アクション）」、「考え抜く力（シンキング）」の平均値は１年次より４年次が上昇していたが、チームで働く力（チームワーク）の平均値は１年次より４年次がわずかに低下していた。

表3　2022年度学生の3つの能力の１年次と４年次の経年的変化

（ｎ＝47）

		平均値	標準偏差	ｔ値	ｐ値	有意差
前に踏み出す力（アクション）	1年次	6.64	1.206	-2.123	0.039	*
	4年次	7.17	1.619			
考え抜く力（シンキング）	1年次	6.47	1.213	-1.592	0.118	n.s.
	4年次	6.85	1.546			
チームで働く力（チームワーク）	1年次	15.47	1.365	0.115	0.909	n.s.
	4年次	15.43	2.411			

*p＜.05

２）12 の能力要素の比較（表 4）

12 の能力要素について１年次と４年次の平均値の差（分散分析）を行った結果、「主体性」が１年次より４年次が有意に高く（F（1,104）＝10.443，p＜.01）、「傾聴力」が１年次より４年次が有意に低かった（F（1,104）＝5.588，p＜.05）。１年次より４年次の平均値が高かった能力要素は、「主体性」「働きかけ力」「計画力」「創造力」「発信力」「情況把握力」の６つであった。１年

次の平均値より４年次が低かった能力要素は、「実行力」「課題発見力」「傾聴力」「柔軟性」「規律性」「ストレスコントロール力」の６つであった。

表4　2022年度学生の12の能力要素の1年次と4年次の平均値の経年的変化

（1年次ｎ＝51、4年次ｎ＝55）

		平均値	標準偏差	F値	p値	有意差
主体性	1年次	2.180	0.478	10.443	0.002	**
	4年次	2.510	0.573			
働きかけ力	1年次	2.040	0.631	3.851	0.052	n.s.
	4年次	2.290	0.685			
実行力	1年次	2.290	0.729	0.027	0.871	n.s.
	4年次	2.270	0.622			
課題発見力	1年次	2.270	1.286	0.221	0.639	n.s.
	4年次	2.220	0.658			
計画力	1年次	2.180	0.623	1.792	0.184	n.s.
	4年次	2.350	0.673			
創造力	1年次	1.980	0.648	1.711	0.194	n.s.
	4年次	2.150	0.650			
発信力	1年次	2.180	0.590	1.236	0.269	n.s.
	4年次	2.310	0.635			
傾聴力	1年次	2.750	0.440	5.588	0.020	*
	4年次	2.510	0.573			
柔軟性	1年次	2.710	0.460	0.315	0.576	n.s.
	4年次	2.650	0.480			
情況把握力	1年次	2.450	0.577	1.570	0.213	n.s.
	4年次	2.580	0.498			
規律性	1年次	2.730	0.568	0.757	0.386	n.s.
	4年次	2.640	0.485			
ストレスコントロール力	1年次	2.570	0.608	0.435	0.435	n.s.
	4年次	2.490	0.605			

*p＜.05　**p＜.01

３．新型コロナウイルス感染症流行前（2019年度４年生）とコロナ禍（2022年度４年生）の社会人基礎力の比較

１）３つの能力の比較（表5）

2019年度の４年生と2022年度４年生の３つの能力についてｔ検定を行い、考え抜く力（シンキング）（t（109）＝3.86, p＜.001）、チームで働く力（チームワーク）（t（109）＝2.98, p＜.01）が新型コロナウイルス感染症流行前（2019年度４年生）より2022年度４年生が有意に低かった。３つの能力すべての平均値は、新型コロナウイルス感染症流行前（2019年度４年生）より

2022 年度 4 年生が低い結果であった。

表5　新型コロナウイルス感染症流行の影響による3つの能力の比較
（2019年度4年生と2022年度4年生の比較）

		2019年度（n＝56）		2022年度（n＝55）		
		平均値	標準偏差	t 値	p 値	有意差
前に踏み出す力（アクション）	2019年度	7.61	1.330	1.893	0.061	n.s.
	2022年度	7.07	1.631			
考え抜く力（シンキング）	2019年度	7.79	1.261	3.864	0.000	***
	2022年度	6.71	1.652			
チームで働く力（チームワーク）	2019年度	16.54	2.264	2.980	0.004	**
	2022年度	15.18	2.517			

** p ＜.01　*** p ＜.00

２）12 の能力要素の比較（図 1）

新型コロナウイルス感染症流行前（2019 年度 4 年生）とコロナ禍（2022 年度 4 年生）の 12 の能力要素のデータの比較のため、χ^2検定を行った。一番有意差のあった能力要素は、「課題発見力」（χ^2 (2) ＝17.019, p＜.001）であり、新型コロナウイルス感染症流行前（2019 年度 4 年生）が有意に高かった。「実行力」（χ^2 (2) ＝7.708, p＜.05)、「創造力」（χ^2 (2) ＝12.691, p＜.01)、「発信力」（χ^2 (2) ＝7.761, p＜.05)、「傾聴力」（χ^2 (2) ＝11.337, p＜.01)、「柔軟性」（χ^2 (2) ＝9.740, p＜.01)、「規律性」（χ^2 (2) ＝7.171, p＜.01）の 6 つにおいても、新型コロナウイルス感染症流行前（2019 年度 4 年生）が有意に高かった。

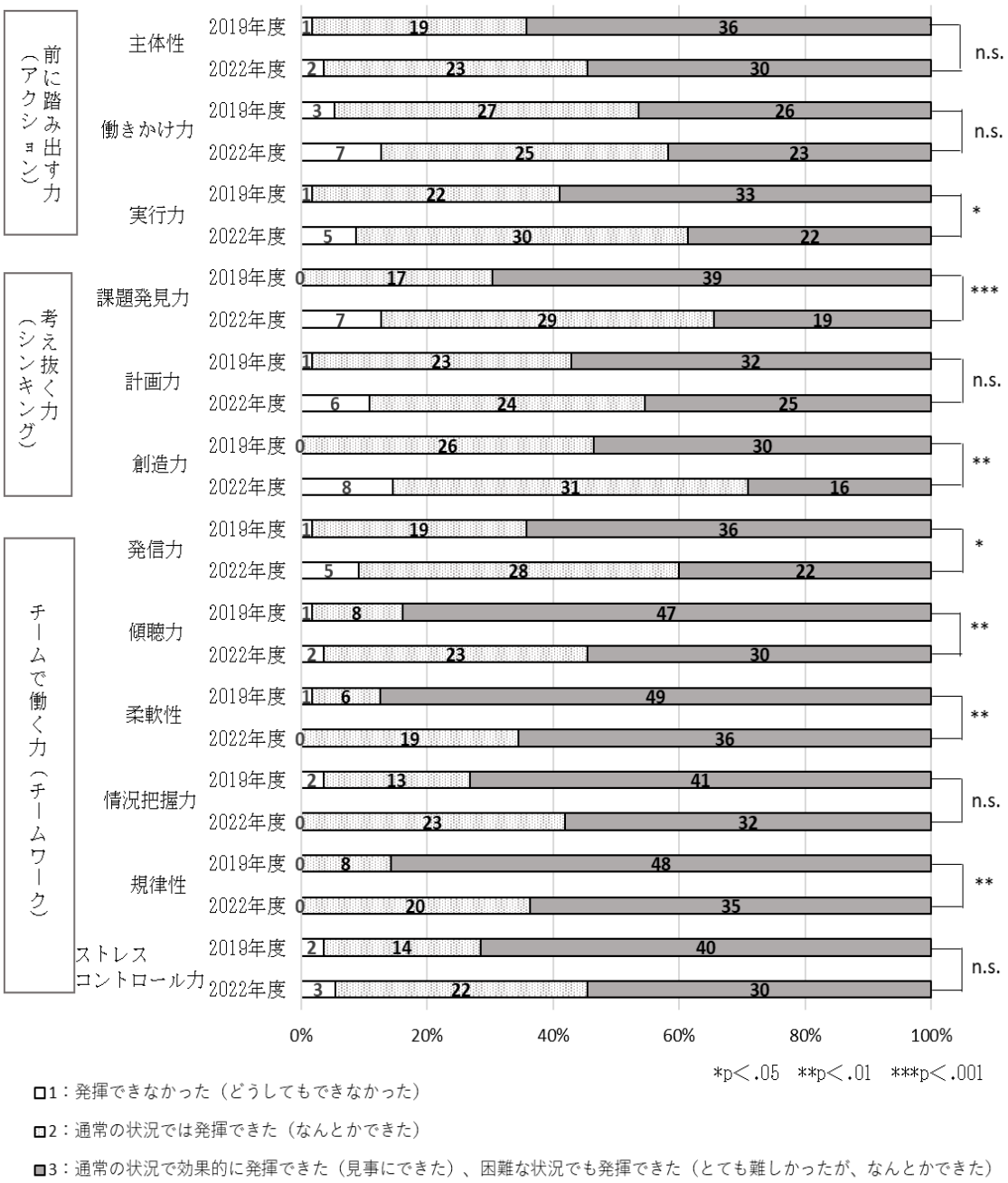

図1　新型コロナウイルス感染症流行による12の能力要素の比較（2019年度4年生と2022年度4年生の比較）
（2019年度n=56 2022年度n=55）

Ⅳ．考察

１．2022年度の学生の１年次と４年次の経年的変化

社会人基礎力の経年的変化おいては、北島ら[9]、奥田[10]の研究では、１年次より４年次が高い傾向がある、市川・山野内の研究[11]では最終学年において「創造力」を除くすべての要素が最も高い結果が得られている。2022年度の学生の１年次と４年次の経年的変化では、３つの要素の前に踏み出す力（アクション）のみ有意に高くなっており、同様の結果が得られている。しかし、

チームで働く力（チームワーク）が 1 年次より 4 年次がわずかに低下しており、新型コロナウイルス感染症流行による臨地実習の減少の影響があったものと推測する。実習は社会人基礎力を育む貴重な体験学習の場である [12]。2022 年度 4 年生は、新型コロナウイルス感染症流行により、学内実習が多く、体験学習の場である実習を経験できなかったことが一つの要因であると考えられる。また、社会人基礎力の伸長には日常生活における多様な人々との関わりが効果的とされている [3] が、2022 年度 4 年生は 2 年次から新型コロナウイルス感染症流行により、アルバイトやボランティアといった活動も制限されていたことも要因と推察する。北島ら [3] は、アクションに対し影響力を及ぼした要因として、授業時間以外に自己学習する、スポーツをすることを挙げていた。しかし、新型コロナウイルス感染症流行により、アルバイトなどの飲食業を始めとするサービス業の雇用制限など、学内においても飲食時の会話禁止、３密禁止による座席の距離をとるなど人的交流にも制限される日常生活を送ることになり、チームワークを学ぶ経験が少なかったことも考えられる。

12 の能力要素の経年的変化では、「主体性」のみ、1 年次より 4 年次が有意に高かった。「主体性」は「意欲や自信を支える自尊感情を含み、自律性から積極性、さらに自己理解、管理・評価能力までカバーする力であり、他の社会人基礎力の 11 の能力のベース」[2] となる。「主体性」について上野ら [12] は学生自ら学習に向き合い考え行動することが主体性の向上につながったと述べている。自ら学習することは臨地実習、学内実習に関わらずできることであり、本研究の対象者も自ら学習に向き合ってきたことが考えられる。

また、「傾聴力」が 1 年次より 4 年次が有意に低く、「実行力」「課題発見力」「柔軟性」「規律性」「ストレスコントロール力」の 5 つの平均値が 1 年次より 4 年次に低下した。看護での傾聴力は「他者の知り得た情報として相手の発信を促す質問をしたり、あいづちを打つなど、自らの表情や聴く姿勢を配慮して話しやすい雰囲気をつくり、相手の意見や考えを最大限引き出し、丁寧に聴く力」[2] とされている。「傾聴力」が 1 年次より 4 年次が有意に低かったことや、有意な低下ではなかったものの、5 つの平均値が 1 年次より 4 年次に低下したといった結果は、社会人基礎力の経年的変化の研究結果とは異なる結果であった。市川・山野内 [11] は「実習経験の繰り返しにより社会人基礎力は培われ、自分自身の理解や将来に向けた確かな目標などが自信につながった」、北島ら [3] は「学生にとって異なる背景や環境を持った人々との交流の機会は社会人基礎力にプラスの影響を示したと考える」としている。2022 年度 4 年生は、新型コロナウイルス感染症流行により学内実習となったことにより、実習体験の繰り返しをすることができず、自分自身を見つめ直す機会が少なく、何かができたという自信を持つ機会も少なかったと推測する。さらに、学内実習となったため、実際の患者とのコミュニケーションの機会の減少や、背景が異なる人々や環境が異なる人々との交流の機会が減少したことも要因と考えられる。

２．2019 年度 4 年生と 2022 年度 4 年生の社会人基礎力の比較

3 つの能力の比較では、考え抜く力（シンキング）、チームで働く力（チームワーク）が新型コロナウイルス感染症流行前（2019 年度 4 年生）よりコロナ禍の学生（2022 年度 4 年生）が有意に低かった。新野ら [13] は、考え抜く力（シンキング）を習得する上で、課題の発見、意見交換を通した学びの深化、目標達成にむけた工程化の経験をしていると述べている。12 の能力要素の「課題発見力」が新型コロナウイルス感染症流行前が有意に高かったことや、臨地実習ではほぼ毎日行われている患者とのコミュニケーションや指導者からの指導、学内実習では紙面での事例によるカンファレンスとなり、実際の事例を通して考える機会の減少が「考え抜く力（シ

ンキング)」が低いことに影響している可能性がある。臨地実習での看護は、患者に対して受け持ち学生一人で行うものではなく、学生と病棟スタッフ、多職種が共同し、同じグループの学生や受け持ち以外の患者などが居て成り立つものである。また、看護においては、チームが進むべき目標を理解し、関係するメンバー同士が協力しながら患者への看護を展開する。しかし、学内実習では、紙面上の患者を個々で事例展開し、学生同士のカンファレンスにおける学習の共有が主となるため、チームとして活動することが考えづらく、「チームで働く力（チームワーク）」が低くなった要因と考えられる。

12 の能力要素では、「課題発見力」「創造力」「傾聴力」などの 7 つが、新型コロナウイルス感染症流行前がコロナ禍より、有意に高かった。実習は社会人基礎力を向上させることにつながるが、2022 年度の臨地実習状況は表 2 に示した通り、約 3～8 割となっており、新型コロナウイルス感染症流行により、学内実習が多くなったことの影響があったと考えられる。

臨地実習において学生は患者を受け持ち、臨地という緊張感の中で、看護過程を展開する。看護過程の展開では、課題をみつけ、看護計画を立案し、患者の状態に応じて、修正・追加していく。また日々の実習の中で、自身の行動計画を立案し、受け持ち患者や医療スタッフなどと関わりながら行動する。しかし、学内実習においては、看護過程は展開するものの、患者は実在しない紙面上のものとなり、日々の行動計画を立案する機会も少なく、受け持ち患者や医療スタッフとのコミュニケーションを必要としない。山本・田中[14]は「考え抜く力（課題発見力・計画力・創造力）が最も上昇していたのは看護過程を展開するための課題をみつけ、創造力を働かせ行動計画や看護計画を立てる必要があったからだと考える」と述べている。また、看護における課題発見力は、「問題点の発見には現在の状態と目標の状態・あるべき姿を明確にする必要があり、現在の状況から目標に対してどのような状況であるのかを明らかにしていくことも必要」[2]とされている。看護における創造力とは「対象の個別の状況や看護実践の成果をふまえ、看護実践をより効果的・発展的に展開するために、感性を生かした新たな介入方法を提案することができる力のこと」[2]であることから、患者のイメージがわかないことや、看護実践の成果が目に見えなかったことにより、新型コロナウイルス感染症流行前の「課題発見力」「創造力」がコロナ禍の 4 年生より有意に高くなったと考えられる。臨地実習を積み重ねることで看護師の臨床判断に必要な「気づく」「解釈する」「反応する」「省察する」[15]といったプロセスを直に学習できる。学内実習が多かった学生は看護過程を展開する機会はあったものの、実際の患者のイメージがわかず、「気づく」「解釈する」「反応する」「省察する」といった臨床判断に必要なプロセスの学習も不十分であることが推測される。

看護における発信力は「多職種との話し合いの場面で、対象に起きている問題について自分の意見を論理的に整理し、相手が理解しやすいようにその反応をみながら、スピードや言葉遣いに配慮し、筋道を立てて伝えることのできる力」[2]、柔軟性は「自らの考えにとらわれることなく、意見の違いや立場の違いを理解し、冷静かつ円滑な議論を通して、最終的には決まった方針に従い、最善の結果が出るように努力する力」[2]とされている。臨地実習においては、指導者や病棟スタッフを含めたカンファレンスで培われる力といえる。梅川ら[16]は、「発信力」「傾聴力」が実習後にできるように変化した理由として、日々の看護実践の場面で、指導者からその都度報告の方法について指導を受けたり、困ったときにどのように対処すればよいか助言を受けたりすることによって、学生自身が「できた」と自覚することの重要性を指摘している。臨地実習では、行動計画の発表や実施した内容の報告等、臨地の指導者や患者とのやりとり、学外の人を含めたカ

ンファレンスをする機会を多く経験するが、学内実習ではその経験が少なくなる。新型コロナウイルス感染症流行前の「発信力」「傾聴力」「柔軟性」は、コロナ禍より有意に高かった。このことは臨地実習におけるこれらの経験の多さが影響していると考えられる。また、学内実習では、実際の患者とのコミュニケーションをする機会が少なく、学内実習では学生同士のロールプレイが多くなり、「傾聴力」を向上させる機会が少なかったと推測する。

看護における規律性は「社会人としてさまざまな場面での良識やマナーの必要性を理解し、ルールを守り、自らの行動だけでなく周囲への影響を考えて、責任ある模範となる行動ができる力」[2] である。臨地実習では、言動や行動、態度について、指導を受ける機会が多い。新型コロナウイルス感染症流行前の学生は、臨地実習の中で、指導を受けたことにより、言動や行動、態度ができるようになったと自覚したと考えられる。このことが新型コロナウイルス感染症流行前の「規律性」がコロナ禍より有意に高くなった要因として示唆される。

コロナ禍における臨地実習の減少といった看護基礎教育の状況から見えてくる課題として、患者の反応からのケアの振り返りができていない、礼節、医療者としてのマナーを学ぶ場面が少ない、対面でのコミュニケーションの機会が少ないといった課題が挙げられる。また、末永ら[17] の新型コロナウイルス感染症流行下における新人看護職員研修の実態調査によると、入職後早期の新人看護職員の業務遂行状況において、例年と比べ出来ていなかった割合が高かった内容として、「チームになじむ」「自分からやりたいと発言し、積極的に行動する」であった。本研究の結果でも、末永らの調査の新人看護職員と同様に、新型コロナウイルス感染症流行前と比べコロナ禍が「創造力」「傾聴力」「柔軟性」「発信力」「規律性」が有意に低い結果であった。演習や学内実習でのシミュレーション教育などの教育方法のより一層の工夫やコミュニケーション能力向上の取り組み、学習姿勢や態度に対する指導の工夫が必要である。

Ⅴ．研究の限界と今後の課題

本研究は、対象者のデータを分析する都合上、5 件法を 3 件法に再割り当てしたため、厳密な統計分析とは言えない。また、学生の生活習慣やアルバイトの経験の有無など社会経験といった学生の背景については考慮していないため、一般化できるとは言い難い。しかし、新型コロナウイルス感染症流行による日常生活の制限や臨地実習の機会の減少が看護学生の社会人基礎力にどのような影響があったのかを示す一資料となり得る。今後は同じ尺度を使用した調査を行うと共に、学生の背景等も考慮した分析が必要である。

Ⅵ. 結論

社会人基礎力の自己評価への新型コロナウイルス感染症流行による影響として、以下のことが明らかとなった。

1．1 年次と 4 年次の経年的変化において、3 つの能力の「前に踏み出す力（アクション）」は 4 年次が有意に高く、先行研究と同様の結果であった。しかし、「チームで働く力（チームワーク）」の 4 年次の平均値は低くかった。

2．新型コロナウイルス感染症流行前とコロナ禍の比較では、「考え抜く力（シンキング）」「チームで働く力（チームワーク）」の能力は感染症流行前よりコロナ禍が有意に低かった。コロナ禍の影響とした 7 つ能力要素の中では「課題発見力」「創造力」「傾聴力」「柔軟性」「規律性」「実行力」「発信力」がコロナ禍の方が有意に低くかった。

３．コロナ禍の学生が影響を受けている要因として、臨地実習の減少や背景や環境が異なる人々との交流の機会の減少が要因として挙げられた。また、学内実習が多くなり、患者・指導者との関わりの減少や患者のイメージがわかない、態度面の指導を受ける機会が少ないなども考えられた。
４．看護学生は臨地実習では実際の患者を受け持ち、様々な臨床スタッフと行動し、創造力を働かせ予測したり、傾聴を用いたコミュニケーションしたり、考えたりすることができていた。また、同時に臨地という場所は医療スタッフ、患者、学生などチームワークを学ぶ場でもあった。
５．今後、臨地実習から学内実習に変更した場合、臨場感の伴う教育方法のより一層の工夫や学習姿勢や態度を含めたコミュニケーション能力向上の取り組みが必要である。

謝辞
本研究にご協力いただきました看護学生の皆様に感謝いたします。

COI 開示
研究に関連し、開示すべき COI 関係にある企業等はない。

引用文献
１）経済産業省：人生 100 年時代の社会人基礎力 https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/（2022 年 9 月 12 日付）.
２）箕浦とき子・高橋恵：看護職としての社会人基礎力の育て方第 2 版専門性の発揮を支える 3 つの能力・12 の要素，日本看護協会出版会，東京，2022.
３）北島洋子・細田泰子・星和美：看護系大学生の社会人基礎力と看護実践力および日常生活経験の関係，日本看護学教育学雑誌，22（1），1-12，2012.
４）市川裕美子：看護学生の実習前後における社会人基礎力の自己評価，八戸学院短期大学研究紀要，41，39-49，2015.
５）文部科学省・厚生労働省：新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について（令和 2 年 2 月 28 日事務連絡）https://www.mhlw.go.jp/content/000603666.pdf（2023 年 2 月 6 日付）.
６）文部科学省・厚生労働省：新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について（令和 2 年 6 月 1 日事務連絡）https://www.mext.go.jp/content/20200603-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf（2023 年 2 月 6 日付）.
７）日本看護系大学協議会：2020 年度看護系大学 4 年生の臨地実習科目（必修）の実施状況調査報告書　https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/upload/2020/09/202009koutoukyouiku-houkokusyo.pdf（2023 年 2 月 7 日付）.
８）高橋恵：【with コロナ時代の新人教育】リアリティショックを乗り越えるために社会人基礎力の育成を，看護，73（2），70-75，2021.
９）北島洋子・細田泰子・星和美：看護系大学生の社会人基礎力の構成要素と属性による相違の検討，大阪府立大学看護学部紀要，17(1)，13-23，2011.

10）奥田玲子・深田美香：看護学生の社会人基礎力の経年的変化と影響を及ぼす経験要因，米子医学雑誌，70，13-24-2019.
11）市川裕美子・山野内靖子：看護学生の社会人基礎力の学年別自己評価と変化，八戸学院大学紀要，56，161-166，2018.
12）上野妙子・山下幸代・松本友子，他：看護学生の社会人基礎力の変化についての検討，第 51 日本看護学会論文集　看護管理・看護教育，147-150，2021.
13）新野由子・糸井和佳・清野純子，他：看護学士課程 1 年生の社会人基礎力の変化第 1 報－初年時教育の基礎ゼミを通して－，帝京科学大学紀要，15，1-9，2019.
14）山本幸子・田中マキ子：看護学臨地実習が社会人基礎力に影響を及ぼす要因，日本看護学会論文集　看護教育，（49），67-70，2019.
15）古屋真理子：「臨床判断モデル」を活用した、「臨床的学び」を支援する実践例　救急外来の現場から，看護教育，63（4），446-450，2022
16）梅川奈々・北尾良太・新井祐恵，他：成人看護学実習の前後で変化した看護学生の社会人基礎力，日本看護学会論文集　看護教育，（45），98-101，2015.
17）末永由理・佐々木美奈子・駒崎俊剛，他：厚生労働行政推進調査事業費補助金（厚生労働科学特別研究事業）分担研究報告書　新型コロナウイルス感染症流行下における新人看護職員研修の実態調査　https://mhlw-grants.niph.go.jp/system/files/report_pdf/202106012A-buntan3.pdf（2023 年 2 月 16 日付）

執筆者紹介（所属）
佐々木真湖　八戸学院大学健康医療学部看護学科　講師
切明美保子　八戸学院大学健康医療学部看護学科　准教授
古舘美喜子　八戸学院大学健康医療学部看護学科　講師
田中克枝　　八戸学院大学健康医療学部看護学科　教授